私のキャリアデザイン >>> 第3回

私なりの「パブリック」の活動の形を追い求めて
――行政とNPOと

千葉県職員／
NPO法人「6時の公共」代表理事
仁平 貴子

［にひら・たかこ］埼玉県生まれ、千葉市在住。武蔵野市民社会福祉協議会ボランティアセンター、在日ミャンマー連邦大使館等での職歴を経て、2007年、千葉県庁入庁。2017年、NPO法人「6時の公共」を立上げ。同代表理事。

27歳で千葉県庁に入庁し、かれこれ17年の歳月が過ぎました。一生県庁で働くことだけを想定していたわけではない私にとって、それなりに長く公務員でいられたと、正直思っています。しかし、まだしばらくは役所で働いていくつもりでいます。まだ、公務員の立場で、やることがあると思うからです。

また、私はもう一つのパブリックの顔を持っています。NPO法人の代表です。2017年に立ち上げ、活動規模は小さいながら6年半が経ちました。詳しくは後でお話しします。

私は、田舎の小さな町で育ったためか、小学校高学年から、なぜか「日本って、つまらない」と思っていました。古いこと、おかしなことを変えるなどして、社会をより良く、おもしろくすることに、一生懸命な大人たちに出会えないと感じていたのです。私はこの頃から、そうした活動、すなわち、「パブリックをよくつくる」ということについて、職業選択や様々な活動の機会を追い求めてきました。

20代――入庁前キャリア

高校からボランティア活動を始め、大学では、国際関係学を学びました。大学時代には、軍事政権下で海外からの支援が手薄だったミャンマーと縁があり、学生ボランティアセンターの一員として、同国の福祉施設等を支援するプロジェクトを立ち上げました。活動のみならず、地域研究のためシンガポール国立大学に1年間留学し、国の姿を知ることにも努めました。また、仲間がミャンマーの教育支援に取り組むNGOを設立することとなり、私も参画しました。

20代は、様々なセクターで意図的に転職を重ね、広い視点で物事をとらえ、職業人として一番輝ける所を探そうとしました。

まず、大学卒業前から卒業をまたぎ、国際協力NGOである「セーブ・ザ・チルドレン」で、インターンとして国際教育事業に携わりました。多様なスタッフやボランティアとが一緒になり、創造性豊かに事業を作り上げるおもしろさに感動を覚えました。卒業後は、武蔵野市民社会福祉協議会でボランティアコーディネーターとして9カ月ほど働き、地域に根差したボランティアコーディネーションの重要性を肌で感じました。

その後は、学生時代に活動許可を得るため度々訪れていた在日ミャンマー連邦大使館からお声がかかり、経済商務部で2年弱ほど働きました。書記官を支える仕事をして気づいたのは、やはりその国を本質的に変えるためには、その国の人が自ら決断し、行動しなければならないということです。この時、「私も、自分の住む日本で、地域づくりをしたい」と思うようになりました。

ただ、民間企業で働くことも諦めきれず、半年ほど派遣社員としてサニタリーメーカーでの勤務も経験しました。20代後半の選択がこの先の人生を変えていくと悩みましたが、

公務で地域社会づくりに取り組んでみたいと、公務員試験を受けることにしました。

生まれ育った埼玉県だけではなく、広い視点で地域を見たいと、同じ関東圏でライバル（？）の千葉県の試験を受けました。晴れて千葉県庁に入庁し、第一志望であった産業振興課からスタート。中小企業のデザイン振興に取り組み、公的な事業をゼロから形にする企画のいろはを学びました。

30代 ―― 地域振興・ボランティア振興、課外活動や自己研鑽

その後、保健所行政を経験してから、「ちばアクアラインマラソン」の企画担当となりました。地元自治体や委託事業者、各種団体や市民など、多くの主体と膝を突き合わせてイベントを作り上げる仕事に、大きな達成感と地域振興の醍醐味を感じました。

東京２０２０オリンピック・パラリンピック競技大会の招致が決まり、私は、千葉県ゆかりの選手の広報を1年間担当しました。レガシーの残る英国の視察を経て、庁内公募の制度で、大会開催地を案内する「都市ボランティア」の企画担当になり、5年間と長く業務に従事しました。最も気力や体力がある壮年期にボランティア振興に取り組みたかったので、まさに念願が叶った形となります。

千葉県の都市ボランティアは2倍以上の応募の中、選考された方々は研修に熱心に取り組んでいました。しかし、そこを襲った新型コロナウイルス。大会が延期となり、度重なる路線変更で困難な局面の連続でした。

そのような中でも、千葉県では最後まで諦めない姿勢で、活動現場に立つことを想定した研修に取り組みました。最終的に現場に立つことは叶いませんでしたが、オンラインで選手の応援をしたり、外国語で観光案内したりする「リモートボランティア」に取り組むことができました。我々行政の側も創意工夫が求められましたが、何より、そうした企画に、柔軟に創造力を働かせて取り組んでくれた市民の皆さんの力なくしては実現できませんでした。大災害を受け、実現できないこと、悔しい思いの連続でしたが、同時に得たものも多く、職業人生の中で記憶に残る大仕事になりました。

入庁後は様々な自己研鑽にも取り組んできました。平日夜、都内にあるＮＰＯ法人「一新塾」（政策塾）に通い、志を持ち仲間を募ってプロジェクトを立ち上げる方法を学びました。また、デジタルハリウッド（専門学校）で、ＣＧなど映像制作のスキルを学びました。こうした知識やスキルは、公務や様々な場面で大いに役立っています。

その他、同期と学習会を行ったり、先輩職員が立ち上げた公務員同士の交流会「チーム千葉県」にも参画しました。その延長線上で自らもまちづくりに関する学習会を主催するようになりました。学習会活動を続けていると、次第に公務員以外の方、市民や議員、学生なども集まるようになりました。こうした経緯で、より安定的に活動を継続・発展させるために、ＮＰＯ法人「６時の公共」を立ち上げることにしたのです。

ＮＰＯ活動を通して実現したいこと

地方自治のしくみから財政、政策立案、時事やトレンドなど、まちづくりに必要な知識やノウハウを学べる場である「６時の公共」は、私が代表理事として旗振り役をし、千葉県内の公務員等を中心とした面々が役員や事務局スタッフとして集い、運営に当たっています。主に、専門家や実務家を講師に招き、平日夜に千葉市内で開催する「みんなの学習会」とそのオンデマンド配信を中心に活動しています。

２０１９年からは、高校で現代社会に代わり「公共」が必履修科目となるタイミングに合わせ、ボードゲーム型教材「僕らの基地がほしいんだ～議会を動かす12カ月～」を開発。２０２０年から、教材を用いた「公共」や「主権者教育」の場での授業や研修の実践に取り組んでいます。

学習会活動については、現在、県内からの参加者が中心となっていますが、さらに他エリアや様々な属性の参加者を募れるよう、企画内容や実施形態に工夫をこらしていきたいです。教材を活用した授業や研修については、地道にファシリテーターを増やしたり、協力団体を探したりして、授業や研修を様々な主体に届けていける体制を

整えていきたいです。

私たちが取り組んでいることは、本当に小さく、ゆるゆるとしたものです。しかしながら、私たちが、市民や議員、学生など様々な人たちの間に立ち、「媒介人」となることには意義があると思っています。つないだ輪を通して、皆が同じ目線で社会課題を捉え、その課題解決策のイメージを共有していけるからです。そこに集まった人たちが、さらにそれぞれの立場で知恵を広め、コミュニティをより良くしていくことにつながっていきます。引き続き、信念を持って、活動を積み重ねていきたいと思っています。

あらためて、行政と市民との関係性とは

市民活動の推進や公務に従事する中で、考えることがあります。

市民活動の裏には、大なり小なり社会課題が横たわっています。しかし、日本ではそれらの根本的課題解決に向けて、様々なステークホルダー（利害関係者）間の役割分担についての前提が共有されていないことが多いと感じます。そこに対話不足が拍車をかけ、行政の不作為が主な原因とされ、最終的に行政が仕事を引き受けるという結末がしばしばあります。これは、長らく「公共＝官（行政）」という意識が続いていたことも無関係ではありません。

一方で、市民の側を見ると、かつてに比べ、パブリックをつくる活動が大いに活発化しています。社会起業や企業等各種団体のSDGsに向けた取組などの活動も目立ちます。

まだまだ足りていないと思うのが、主権者である市民による首長（行政）や議会へのアプローチです。選挙で首長や議員を選出し、間接的に自治体運営に関わることはもちろん大事です。加えて大事なのは、自治体運営についてできる限り俯瞰的な目線を持ち、様々な方法で、行政や議会に具体的な提案をしていくことです。

その際、独りよがりにならず、多くのステークホルダーとの対話を通して、バランス感覚を養っていくことが重要だと思います。日本人は衝突を避け、対話を嫌う傾向にあります。しかし、対話の上での役割分担や取捨選択なくしては、知恵を出し合い、自分たちの責任で地域の設計をしていくことは、到底困難なのではないでしょうか。

引き続き、絶え間なく、制度上で行政や議会への市民参加を担保するのみならず、主権者の学びを進めることも不可欠です。行政も「市民のためにこうするのだ」という強い想いと創意工夫で、課題への突破口を見出さなければなりません。市民と行政、議会とが、緊張感と信頼を持って向き合えば、そこに本来のパブリックの形が見えてくるはずです。

これからの私

人生というマラソンのハーフ地点を迎え、仕事がひと段落したタイミングで、私はひどいうつに陥り、体調を崩してしまいました。巨大な組織で物事を一足飛びに変えられないフラストレーション、離れて暮らす母親の心配、自身が年齢を重ねていく上での漠然とした不安…悩みが一気に押し寄せました。

上司に相談してしばらく休職し、実家で静養する時間をいただきました。これまで一心不乱にパブリックを追い求めてきた自身の動き方を振り返り、今では仕事や活動の傍ら、自分自身をもっと大切に労い、人生のバランスをとるよう心がけています。

職場においては、多様な考え方を持つ職員が、真に市民目線で課題解決に当たることができるよう、職員同士が対話を深められやすい風土作りを進めていきたいです。

活動分野としては、公務やNPO活動を問わず、主権者教育や地域の大人たちが学校運営に取り組み、子どもたちの教育を推進していく活動に関心があります。また、個人的にも、社会教育士を取得するなどし、より体系的に学校教育に留まらない学びの場が社会を活性化させていく活動に取り組みたいと考えています。

市民と行政、政治をつなぐ活動、それはまだまだゴールの見えない取組です。だからこそ、残り半分の人生もやることが尽きないものになると、今、自分のミッションを確かめているところです。